



天然記念物の野鳥

○……………
はじめに

本道に生息する野鳥で特別天然記念物または天然記念物に指定されているものは、迷鳥と考えられるコウノトリとイヌワシ、留鳥のタンチョウとシマフクロウなど。それに渡り鳥のガン類などに区分することもできるので、本稿ではこの分けかたによることとし、それに集団繁殖地を加え、四項目に分けて概要を説明することにした。

○……………
迷鳥

本州各地に広く生息し数も少なくなかったコウノトリは、明治に入ってからの狩猟圧と開発による環境の悪化、さらに戦後は農薬の問題も加わり、減少し続けてきた。

コウノトリが狩猟鳥から除かれたのは一九一〇年のことで、その後、一九一八年に天然記念物に指定され一九五六年には特別天然記念物に指定されている。しかしこの間もコウノトリは減り続け、一九七一年には人工飼育での増殖を試みるため、最後の生き残りが兵庫県で捕獲されるまでになってしまった。

この時点で、わが国の野生のコウノトリは絶滅したことになるのだが、その後もまれに大陸から飛来するものがあり、野生のものへの保護措置はこの迷鳥のコウノトリを対象にするようになっていた。

コウノトリは北海道では特に珍しい鳥だったが、どういうわけか、わが国では迷鳥のコウノトリしか見られなくなつてから逆に情報が多くなつており、最近十年ほどの間に、苫小牧・函館・札幌近辺などで記録され、一九七四年には札幌文島で一羽保護された。

このコウノトリは、その年の十月に飛来しそのまま年末の寒波で水場が凍り、餌がとれなくなるまで居付き、行き倒れたところを運良く発見された。

コウノトリは気が強い鳥なので、体が弱つたぐらいで人間につかまることがない。餓死寸前まで逃げまわらずだ。このため人間につかまるほどまで弱つたものは、外敵を避ける力を完全に失い、肉食動物に見つかるに抵抗しようのない状態になっていることになる。

したがってこのコウノトリが救われるためには、行き倒れた場所が人目につきやすい道路のそばで、カラスが目ざめないまだ暗いうちに港に向う漁師に通りがかり発見される。という幸運に恵まれる必要があった。そのうえにエキノコックス対策のためキツネは駆除され、犬も飼われていない島、という好条件も加わっている。

保護されたコウノトリは、年末の荒海を渡り札幌の円山動物園まで運ばれて一息つき、翌年多摩動物園に移されて人工増殖に役かわされているが、まだ二世誕生まではいっていない。

一九七五年に函館市郊外の汐泊川に現われたコウノトリは、鳥獣保護員の徹底した観察の結果、途中で姿

を消したが、最終確認は翌年の三月ということがわかっている。道内で越冬したものと推測されている。

このほかのクマゲラの石狩低地帯が中心になっている。これら例からおしめて、これからも道内でクマゲラ情報を開ける可能性はある。定住とか繁殖とかを望むのは無理だとしても、迷い込んでくる珍客がゆつくり休むことができる環境だけは残しておいてやりたいものだ。

イヌワシは、道内で記録されている野鳥のなかで、見た人の数が特に少ない鳥のひとつになる。この鳥は外敵が容易に近寄れない岩棚や樹上に営巣するので、道内でも奥山のどこかで繁殖している可能性を否定しきることはできないが、観察例の少なさからおしめて、迷鳥としておくのが妥当と思われる。

イヌワシの生活圏はひろく、イギリス諸島から日本列島までのユーラシア大陸全域と、アメリカ大陸にも住んでいる分布の広い鳥だ。分布が広いということは環境に対する適応力が強いことを意味していることになる。

東北地方でも繁殖しているイヌワシのことなので、この適応力の強さを發揮して、本道に移り住む可能性を考えないわけではないが、冬になるとすぐ繁殖活動を始めるこの鳥の生態と、本道の山岳地帯の真冬の自然条件の厳しさを思い合わせると、イヌワシの生命力をもつてしても、本道で繁殖することは無理ということになるのかも知れない。

〇…………… 留 鳥

道東の湿原にもわずかに生き残っていたタンチョウは冬の餌不足に妨げられて種族の力を回復することができず、かろうじて死に絶えないだけという状態で、数十年間過ごしてきた。

給餌に成功することでこの最大の障害を取り除き、現状にまで生息数を回復させたのだが、ここまでくると繁殖期の環境不足が次の問題になって、タンチョウがこれ以上増えるのを妨げている。

タンチョウは広いテリトリーを作って営巣する習性を持つているため、一定数のつがい営巣地を定めると、それ以外のものは繁殖能力を發揮できないことになる。これがタンチョウの増加傾向が鈍化する原因になっている。このため今後のタンチョウ保護対策としては、湿原の環境保全とともに、一部を人工飼育下に移しても種全体の数を増す方法を考えることも必要になってくるのかもしれない。

クマゲラは日本産最大のキツツキで、ユーラシア大陸の北部に広く分布している。日本では本州北部でも記録はされているが、主要な生息地は本道になっている。

いまでも生息数が多いとは思えない鳥だが、一九七〇年以前はめつたに見られない鳥だった。クマゲラを見る機会が多くなりだしたのは、一九七〇年前後から禁猟鳥の流通に対する社会の目と、行政機関の指導が厳しくなりだしたのを契機にしている。社会の目が光

り、密猟物を商品にできなくなったことが、この鳥の保護につながっていることになる。

特定の地域でのクマゲラの増減は、森林の盛衰と密接な関係を持っている。

野幌森林公園の例では、たまに声を聞ける程度だったクマゲラが、一九七五年には大沢園地近くの歩道のわきのトドマツに営巣した。その後、数年間は大沢園地周辺で営巣していたが、現在このあたりでクマゲラを見る機会はまずなくなった。原因はこの周辺でのトドマツの虫害木が増え枯損が進み、見るかげもない林になって、クマゲラが住める環境でなくなったためだ。

この間の推移を考えると、健康な林があつてこそ森林の鳥は安心して生活できるのでないか、と思えてくる。虫害木の早期発見、早期除去が健全な林を育てる要諦ならば、その木が野鳥の餌木だとしても取り除かねばならないといったことも考え、当面の野鳥の餌のことと、将来の生活のことを比較検討することにまで視野を広げて、森林と野鳥の関係を考える必要がある。

シマフクロウは衰退し続けている鳥で、特に営巣場所のことを考えると、心細さばかりが先に立つ。

ミズナラ・カシワ・アカゲモなどの広葉樹はゆっくり成長し、百年単位の年輪を重ねて、やっとシマフクロウの営巣場所ができる太さになる。その幹にできる樹洞が適当な大きさになってはじめて、シマフクロウの巣作りができるのだから、苗木を植えてシマフクロウの営巣木を育てることを考えると、気が遠くなってしまう。

このことは、現在利用中の営巣木がなくなると、シ

マフクロウは宿無しになることを意味している。餌場の原始河川の保全とともに、真剣に対策を考えてやる必要がある。

フクロウの仲間は気むずかしそうな外見に似合わず、人工飼育下で繁殖することも知られている。この面の希望が持てるものなら、巢箱のことと合わせて研究してみると、効果があがるかも知れない。

餌場のことでは漁業関係者から、サケ・マス増殖のためにも原始河川の保全が必要だ。と聞かされたことがある。原始河川はシマフクロウの餌場として重要だ。となると、この鳥の保護は地域の産業と協調することで道が開けることも考えられる。これも今後の検討課題のひとつにはなるだろう。

○…………… 渡り鳥

本道で見られる渡り鳥のうち、ワシとガンの仲間が天然記念物になっている。このグループのうちガンの仲間を、狩猟鳥にしている国は少なくない。ガンたちはこれらの国とわが国との間を往来しているという現実を知ると、この鳥たちを天然記念物にしていることについて、気持の整理が必要になる。

コクガン・マガン・ヒシクイの三種類のガンが天然記念物に指定されたのは一九八一年のことで、マガンとヒシクイは一九八〇年まではわが国でも狩猟鳥だった。

その後の保護効果を、春の石狩平野で見ることができ。雪どけが終る頃、このあたりにマガンの群れが

くるとは以前から知られていたが、多くの人に関心を持たれるようになってから一〇年ほどしかたっていない。

マガンの群れは前年の落穂を拾いにくるのだが、猟銃のこわさが記憶に残っている間は、望来沖の日本海を休息地にしていた。

マガンたちが美唄市の石狩川寄りにある宮島沼で休むようになったのは一九七七年のことで、ある日、カモに誘われて数羽が着水し、翌日に群れの半数、その次の日に全群が宮島沼に降りたのを観察した人がいる。この結果、マガンの群れは望来沖まで往復する労をばぶき、荒波にゆられずに休むことができるようになった。この頃からマガンたちは、ぐっと親しみやすい鳥になった。

人間を恐れる必要がなくなったマガンたちの日常生活の変化なのだが、似たようなことを風蓮湖のヒシクイも函館湾のコクガンも経験しているようで、このガンたちも観察しやすくなってきている。

わが国は、関係のある国と「渡り鳥保護条約」を結んでいる。この中には、ガンが繁殖している国もあり、この鳥を狩猟鳥にしている国もある。

ここでわが国の天然記念物が、外国では狩猟鳥になっている問題も関係を持つことになるのだが、渡り鳥保護条約では相手国の国内法による狩猟制度まで制限していない。相互に相手国の事情を認め合うことで、大局的な見地にたった保護対策を進めていくということになるのだろうが、この渡り鳥保護条約の考えかたを基礎にして、わが国の天然記念物が外国では狩猟鳥

の問題を整理し、納得するのが現実的ということになるらしい。

オジロワシとオオワシはウミワシの仲間、水場を主要な餌場に行っているのが海岸・河口・湖・川・ぞいの地域などで見ることが多いが、森林地帯に姿を現わすものもある。オジロワシは道内でも繁殖しているが数は少なく、そのうえ開発の進行にともなって営巣地が減少してきているので、このままではわが国で繁殖するオジロワシはいなくなるという心配がある。

オオワシとオジロワシの生態は似ているが、分布状態は異なり、オジロワシはユーラシア大陸のほぼ全域からアフリカ北部にまで分布しているのに、オオワシはアジア大陸の北東部にだけしか生息していない。

冬になると、以前から道東の海岸を中心にしてワシの姿を見ることができたが、一九八二年から八三年にかけての冬は渡来数が特に多く、魚を捕りそこねて海にはまり、飛び立てなくなったオオワシの幼鳥の写真が新聞にのっていた。魚を常食にしているウミワシが、水にはまり動きがとれなくなるという、常識では考えられないことがおきるほど渡来数が多かったということになるのかも知れない。一九四七年まで、ワシ類はすべて狩猟鳥になっていた。重要な狩猟鳥であるキジやマドリに対する害を除くことと、矢羽根を得ることが主な目的だったらしい。

矢羽根の原料として、尾羽根がねられる本道のワシの受難の歴史は、アイヌの時代までさかのぼることができる。最近輸入品でまかなっているようだが、この方法も早晚ゆき詰るものと思わなければならない。

矢羽根のことは、動物園などのおとし羽根を回収するシステムを作っておくことも、消極的ではあるがワシタカ類の保護につながることになるはずだ。この鳥たちについてはこのほか、剥製が法外な値段で取引きされているという風評にも注意を払っておく必要がある。

○…………… 集団繁殖地

離島の海鳥の集団繁殖地が、国または道の指定を受けて天然記念物になっている。指定されているものうち、オオミズナギドリは繁殖地は道外にもあるが、天売島のウミガラス、道の指定を受けているユルリ・モユルリ島のチシマウガラスなどは、わが国では北海道だけで繁殖している鳥で、北国らしいふんいきをかもし出している。

海鳥の集団繁殖地では、数種類の鳥が集まって営巣しているのが普通で、岩棚などに卵を産むウミガラス、巣穴を掘るエトビリカヤウトウなど、岩礁の上部付近にウミウ、崖になっている周辺部分にはチシマウガラス、といったように、それぞれの鳥が適地をさがして営巣している。

これらの鳥の主要な生活場所は海で、繁殖期以外は陸上に上がらないものも多い。この鳥たちが離島や海岸の崖など、人間が容易に近付けないところを営巣地に行っているのは外敵を避けるためで、この地理条件のため卵やひなを奪われる危険が少ないということ、ウミガラスのただ一箇といった例のように、一般的に

産卵数が少ないのが特徴のひとつになっている。

しかし海鳥の集団繁殖地もユートピアではあり得ず弱肉強食の世界であることに変わりはない。集団繁殖地の近くにカラスの営巣適地があれば、そこに住むカラスが巣をうかがうのは当然だが、営巣期にテリトリーを作る性質のあるカラスのことなので、群れを作った海鳥をおびやかすことがないため、被害は大きくならずすんでいる。

海鳥たちに深刻な被害を与えているのは皮肉なこと、その鳥じたいが集団繁殖地の一員で保護の対象になっているオオセグロカモメで、交通不便などでおきていることのため良く知られていないが、無視することはできない暴威を振るっている。肉食性のオオセグロカモメが海鳥たちの天敵になっているのは当然のこと、この鳥たちの種族が地球上に誕生して以来、天敵と餌動物の歴史を続けてきている。

自然界の平衡を保つためにも、食うものと食われるものとの存在は必要で、この意味では捕食者であるオオセグロカモメの存在を問題にする必要はない。しかし捕食者の数が多くなり過ぎ、しかも増え過ぎた動物を餌不足などを原因にして減らす、自然界の平衡機能が適切に働かなくなっているとしたら、放置しておけないことになる。

北海道の動物は冬の餌不足のために生息数を制限されているものが多く、冬には南に移動するものもおりはするが、オオセグロカモメもこの仲間に入っている。冬を耐えて生き残ったものだけが、次の年に集団繁殖地を襲える。オオセグロカモメと餌になる海鳥たち

は、この原則のうえに立って種族間の平衡を保っていた。この平衡関係に影響を及ぼしているのが人間で、生産活動が盛んになってきているための生ごみと、水産物などの加工屑が増えていることが原因になっている。冬の間には本来は餌不足のため自然淘汰されるはずだったオオセグロカモメのうち、どれほどのものが、人間が捨てるごみやくずで生き延びられるものかわからないが、ごみ捨て場などに集まるカモメの群れを見ていると、相当多くのものが生き残る機会を得、その数が適正なもの以上になりそうだと推定することはできる。食肉鳥が適正な数以上に増えるようになっては、餌になる動物はたまったものではあるまい。離島で繁殖している海鳥たちには、このことが現実のものになっているのではないかと不安が、ウミガラスやチシマウガラスがいなかった、オオセグロカモメがやけに多かったなどという、離島調査の報告を聞くたびに増大してきている。

○…………… おわりに

野性動物の保護は地域の協力を得なければ成功しない。ところがその動物は一次産業の加害者になる場合がある。このため地域の人は生活を守るために、保護に協力したくても二の足を踏むことになる。その結果のひとつが、ゼニカタアザラシの天然記念物指定見送りに表われている。この事実に留意し、地域の悩みを全国民ものとして解決策をはかることに、今後の保護施策発展のかぎがひめられていると思われる。